

氏名 やまざき たつえ  
山崎 達枝

学位の種類 博士 (医学)

学位記番号 富医薬博乙第 68 号

学位授与年月日 平成 30 年 2 月 28 日

学位授与の要件 富山大学学位規則第 3 条第 4 項該当

学位論文題目 The Stress Response of Rescuers: Part 1, Stress responses of caregiving staff in 2007 Niigata-ken Chuetsu-oki Earthquake; Part 2, Stress responses of nurses in 2004 Niigata-ken Chuetsu Earthquake.  
(救援者のストレス反応：第一部，2007 新潟県中越沖地震における介護職のストレス反応；第二部，2004 新潟県中越地震における看護職のストレス反応)

論文審査委員

(主査)	教授	鈴木 道雄
(副査)	教授	田村 了以
(副査)	教授	稲寺 秀邦
(副査)	教授	木村 友厚
(紹介教員)	教授	奥寺 敬

# 論文内容の要旨

2004 新潟県中越地震における看護職のストレス反応

Stress responses of nurses in the 2004 Niigata-Ken Chuetsu Earthquake.

要旨：

本研究の目的は、災害による看護職の外傷後ストレス障害の有無や強弱に影響を及ぼす要因(年代、職位、急性ストレス反応)を検討することである。2004年に発災した新潟県中越地震発生後約1年10ヶ月後にあたる2006年7月に、被災地内の14病院施設842名の看護職に、質問紙調査を行なった。

分析の結果、年齢が高いほど、さらに急性ストレス反応が強いほど、PTSD反応の「再体験・侵入的想起」「回避」の傾向が強かった。さらに、年齢が低いほど、急性ストレス反応が強いほど、PTSD反応の「再体験・侵入的想起」が強いほど、被災後の退職の検討が多かった。

自由記述回答の分析の結果、「出勤できなかったことを厳しく追及・批判された」ことに対して辛く感じている看護職が多かった。その一方で、被災時に周囲からの励ましや労いの言葉を受けたことで、楽になったり、頑張れるという気持ちになった看護職が多かった。

Abstract

This study was conducted in July 2006, one year and 10 months after the 2004 Chuetsu Earthquake. The relationship between the PTSD responses and factors such as age, duty position, and acute stress response were investigated among nurses that experienced the earthquake and who responded to a questionnaire (n = 842). Results indicated the following. (1) High age and acute stress responses promoted PTSD, as well as “intrusion” and “avoidance.” (2) Low age, acute stress responses and “intrusion” promoted thoughts about retirement. Results of free responses indicated the following. (1) Criticism by coworkers for not being able to commute to the hospital was painful for most nurses, where as (2) encouragement and support by coworkers invigorate them.

キーワード：惨事ストレス、外傷後ストレス障害、改訂出来事インパクト尺度（IES-R）災害救援者

Key word: Critical Incident Stress、Post Traumatic Stress Disorder=PTSD、Impact of Event Scale-Revised=IES-R、Disaster worke

## 2007 新潟県中越沖地震における介護職のストレス反応

Stress responses of caregiving staffs in the 2007 Niigata-Ken Chuetsu-oki Earthquake.

### 要旨：

本研究の目的は、災害による介護職者のストレス反応の有無や強弱に影響を及ぼす要因を検討することである。2007年に発生した新潟県中越沖地震に被災した介護4施設172名の介護施設職員を対象に、被災後1カ月時点での質問紙調査を行なった。

自由記述回答の分析の結果、介護施設職員は被災時に「通勤に時間がかかった」ことや「生活用水の不足によってケアに支障が生じた」などの点に苦勞していたことが明らかになった。また、年齢と急性ストレス反応が高いほど、PTSD症状は強く、退職検討も多かった。職場における訓練の有無はストレス反応や退職検討に影響していなかった。

### Abstract

This study was conducted one month after the 2004 Chuetsu-oki Earthquake. The relationship between the PTSD responses and factors were investigated among care-giving staff that experienced the earthquake and who responded to a questionnaire (n = 172). Results of free responses indicated the following. (1) Staffs had a lot of time and cost in commuting, and (2) There were obstacles with cares by lack of life water. Results indicated the following. (1) High age and acute stress responses promoted PTSD and thoughts about retirement, whereas (2) disaster drills had no effect for PTSD and thoughts about retirement.

キーワード：惨事ストレス、外傷後ストレス障害、改訂出来事インパクト尺度（IES-R）災害救援者

Key word: Critical Incident Stress、Post Traumatic Stress Disorder=PTSD、Impact of Event Scale-Revised=IES-R、Disaster worker

# 学位論文審査の要旨

## 【目的】

阪神・淡路大震災以降、広域の自然災害における救援者のストレスが問題とされるようになり、救援者の方が被災者よりも心的外傷後ストレス障害（PTSD）にかかる割合が高いという報告もある。被災地域に住む消防職員、看護職者、介護職者などの救援者の多くは、自らが救援者であると同時に被災者である（二重の被災者）という立場にあり、より強い葛藤や苦悩を持ちながら救援業務に従事することになる。このうち消防職員におけるストレス反応については検討が行われているが、看護職者や介護職者ではほとんど検討されていない。また、これまでの自然災害におけるストレス反応の研究は、対象は被災者か救援者のいずれかの立場として扱われており、被災者であると同時に救援者であるという視点からの検討は行われていない。

本研究で山崎達枝氏は、新潟県中越沖地震および新潟県中越地震において、被災しかつ救援に当たった看護職者と介護職者を対象にストレス反応（急性ストレス反応、精神的健康度、PTSD症状）について調査し、ストレス反応の強弱に影響を及ぼす要因や離職との関係などについて明らかにすることを目的とした。

## 【方法】

研究1では、2007年の新潟県中越沖地震の被災地域内の4つの高齢者施設および精神障害者施設に勤務する看護職および介護職者172人を対象に、発災1ヶ月後および12ヶ月後に調査を行った。研究2では、2004年の新潟県中越地震の被災地域内の14の病院に勤務する看護職者1000人を対象に、発災22ヶ月後に調査を行った。

調査項目は①対象者の属性（性別、年齢、職位）、②被災直後の急性ストレス反応（Acute Stress Reaction, ASR）チェックリスト、③精神的健康尺度12項目版（General Health Questionnaire-12, GHQ-12）、④PTSD症状を評価する改訂出来事インパクト尺度（Impact of Events Scale-Revised, IES-R）、および⑤地震発生から1年間の勤務における退職検討を含む苦労などに関する質問票を集団配布し、個別郵送により回収した。IES-R得点の属性による比較や継時的変化の解析、GHQ-12得点とその継時的変化の解析、退職検討を含む勤務における苦労を従属変数、属性、ASRチェックリスト得点、IES-R得点を独立変数にした重回帰分析とパス解析などを行った。

調査に当たっては倫理的配慮を十分に行い、共同研究者の所属施設の倫理委員会の承認を得た。調査実施後には苦情や批判を受ける電話窓口を設置した。

## 【結果】

調査票の回収率は、研究1では1ヶ月後は100%、12ヶ月後は75%、研究2では84%であった。

研究1：IES-R得点の年齢階級別（20歳代以下、30歳代、40歳代）の比較では、「再体験」の項目得点が40歳代においてそれ以下より高かった。IES-R得点によるPTSDハイリスク群の割合は1ヶ月後で19.5%であり、1年後に「再体験」と「過覚醒」の得点は低下したが「回避」の得点は逆に上昇していた。GHQ-12得点による1ヶ月後の精神的不健康の割合は52.1%であり、1年後には改善していた。退職を検討したものは26.8%であった。重回帰分析とパ

ス解析では、ASRが高いほどPTSD症状が強く、精神的不健康が多く、退職検討が多かった。

研究2：IES-R得点の年齢階級別（20歳代以下、30歳代、40歳代、50歳代以上）の比較では、「再体験」と「回避」の項目得点が50歳代以上において20歳代以下より高かった。職位による差異はなかった。IES-R得点によるPTSDハイリスク群の割合は7.9%であり、ASRチェックリスト高得点者により多かった。退職を検討したものは15.7%であり、経済的理由により思いとどまった者が多かった。重回帰分析とパス解析では、年齢が高いほどまた ASRが高いほどPTSD症状が強く、ASRが高いほどまたPTSDの再体験症状が強いほど退職検討が多かった。

### 【総括】

本研究において山崎達枝氏は、被災地に勤務する看護職者および介護職者は、被災後に長期間持続するPTSD症状を生じうる強いストレス環境下であり、年齢が高い職員においてまた被災直後のストレス反応が強いと、PTSD症状が生じやすく、退職検討が多くなることを明らかにした。これらの結果より、地域社会が瞬時に崩壊する地震災害では、看護職者および介護職者にとって、自らの被災体験に加えて、被災によって生じる累積的な救援者としての業務負担が、強く持続するストレス環境を形成し、PTSD発症を促進する重大な要因となることが推測され、またそれが被災地の医療機能の回復・維持を妨げる要因となると考えられた。また、被災者であり救援者となる者に対して、被災直後のASRを緩和するとともに、年齢も考慮した長期的な精神的健康への配慮・支援が重要と考えられた。

本研究は、アンケート調査の限界はあるものの、自らが救援者であると同時に被災者であるという視点も加えて、これまで検討の乏しかった看護職者および介護職者における被災後のストレス反応とそれに影響する要因を明らかにした点で新規性が高く、医学における学術的重要性を有する。また、今後の地震災害での支援システムを考える上で重要な知見を示した点から臨床的発展が期待できる。以上より本審査委員会は、本論文を博士（医学）の学位に値すると判断した。